平成22年度 富里歴史講座　　於：富里市立図書館　　２０１１・２・２０

第4回「富里の三匹獅子舞」

～ 消えた獅子を探して ～

林 田 利 之

●三匹獅子舞の起源

獅子舞は８世紀（西暦700年代）に伎楽（「呉楽（くれがく）」「伎楽儛（くれのうたまい）」（図１）ともいわれるように、中国南部の仏教文化圏であった呉国に由来する楽舞）や散楽（物真似や軽業・曲芸、奇術、幻術、人形まわし、踊りなど、娯楽的要素の濃い芸能の総称。日本の諸芸能のうち、演芸など大衆芸能的なものの起源とされている）などと共に中国から伝えられたものです。

図１　伎楽の獅子

獅子は、シシ（四足獣）を総称する言葉で古来より用いられており、その名残はイノシシのシシにも見られます。勿論、獅子舞の獅子はこの四足獣を表すものではなく空想上の生き物を差しており、龍や麒麟などと同じ発想から生まれた縁起の良い生き物でした。

当時の人々はこれまで見たこともない獅子頭に目の当たりにして、神秘的なもの、霊力を秘めたものと感じたのではないしょうか。伝来当初こそ、宮中等の特別な場所と特別な人々しか見ることのできないものでしたが、「悪疫を退散させる神」としての役目を担うことから瞬く間に日本文化に浸透し、江戸時代には全国に流布していったと考えられます。

●二種類の獅子舞（伎楽系（ぎがくけい）と風流系（ふうりゅうけい））

獅子舞には大別して二種類あります。一つは伎楽系（神楽系ともいいます）（図２・３）といわれる獅子舞で、伊勢の太神楽が代表的なものです。伎楽系は西日本を中心に全国的に分布しており、胴体部分に入る人数によって大獅子、中獅子、小獅子と区分されます。

また、大獅子では獅子を操作する人以外にも囃子方が胴体に入って演奏するパターンもあります。お正月に見る獅子舞や神楽での獅子舞をはじめ、一般的に獅子舞というとこの系統の獅子舞を差します。

風流系は関東・東北地方を中心に分布している獅子舞で、一人が一匹を担当し、多くはそれぞれが腹にくくりつけられた太鼓を打ちながら舞うスタイルをとっています。

図２　伎楽系の獅子舞（伊勢の太神楽）

「風流」はもともと雅やかなものを差していう言葉でしたが、後に美しい仕立て物や仮装行列の華やかに装って大勢で踊る踊りなども差すようになります。この舞は三人が獅子頭を乗せ、背に御幣をつけ、腹に太鼓をつけて舞うことから「風流の獅子舞」、「三匹獅子舞」、「一人立ちの獅子舞」、「羯鼓舞（かっこまい）」（図４）などと呼ばれています。

図３　鹿野山の梯子獅子舞

図４　館山の羯鼓舞

東北の一部には７～８頭で一組となる鹿踊り（ししおどり）（図５）などもありますが、最も多いのは三匹一組の三匹獅子舞であり、東京・埼玉などのかつて武蔵野国と呼ばれた地域の農山村では一般的な郷土・民俗芸能となっています。

三匹のうち一匹は雌獅子と呼ばれるのが通例であり、雄獅子二匹が雌獅子を奪い合うというストーリー展開の演目を持つ場合が多く、伴奏には「篠笛」と竹でできた「ささら」という楽器が使われます。また、ささらが使われない三匹獅舞もあります。三匹獅子舞の起源はやはり西日本と考えられており、太鼓踊りまたは陣役踊りであろうといわれており、これらの踊りの中心にいる数人が頭上のかぶり物を獅子頭に変えたものが始まりだという説が優勢です。

図５　岩手県遠野市の鹿踊り

しかし、東国の風流系の獅子舞はもっと古くからある日本古来の獅子舞であり、獅子頭（ししがしら）も本来は鹿や猪を模したものであったという説も根強く支持されています。獅子頭は通常木製（桐製）ですが、獅子以外に竜頭のものや鹿頭のものもあります。